異端の魔術師

獅子乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異端の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ１５７３Ｎ

【作者名】
獅子乃

【あらすじ】
＞未来視＜の能力を持った少年が、その能力と生活を引き換えに異世界へと旅立ちます。
その異世界は、剣と魔法なファンタジーな世界。＞未来視＜と引き換えに貰った能力は彼に何をもたらすのか。。。
両親から愛情を注がれなかった彼が、人間として魔術師として傷つきながら成長していく姿を書いていきたいと思います。

基本的には、主人公至上主義な展開となり、主人公は最強設定です。
受け付けない方は、ご遠慮ください。

００１　最後の現世－１（前書き）

これは、誤って短編小説で投稿してしまった『先喰らい』とスタートは一緒です。
それでは、よろしくお願いします。

００１　最後の現世－１

それに真っ先気付いたのは、両親だった。
『それ』を知った両親は俺を『息子』として扱うことを辞めた。
その日から俺に自由はなくなった…
それは事前に『見えて』いたが、幼かった俺には信じられなかったんだ。
あの優しかった両親がああも変わってしまうなんて…

「…ろ……お…ろ…起きろと言っている！！」

バシャ

「うわぁ！！げほっげほ…ごほ…
…おはようございます。
旦那様。」

突然の冷水に俺の意識は急速に覚醒し、
目の前にいる人物へ挨拶を行う。

「目覚めたか？
わかっていると思うが、仕事だ。」

そう言って一束の写真つきの資料を投げてくる。

「その男の未来…1ヶ月分だ。1時間でまとめろ。」

「かしこまりました。
…旦那様、資料作成後少しお時間を頂けないでしょうか？」

旦那様――俺の父親だが――は怪訝そうな顔をこちらに向け、少し考えた後

「いいだろう。たまには家族としての会話も必要だ。
ただし、30分までだ。」

「ありがとうございます。
その時に母にも会いたいのですが…」

「ふん…貴様何を考えている？
まぁいい。
直接は来ないだろうが、話せるようにはしてやろう。」

そう言って背を向けてエレベーターへ歩き出した。もう話は終わりということか…
この生活も後数時間なのにな。
家族として…か。
そんなこと思ってもいないくせに。

俺は内心笑っていた。もちろん顔には出さない。
…いや、出せないと言うべきか。
ここ10年程感情を動かさなかったからな。
今の感情を何と表すのか、最初はわからないほどだったのだから。
今ならこれを表せられる。

これは歓喜だ！！
まぁ、まだ喜ぶのは早い。

「まずは、仕事だな。
現世での最後の…な」

００１　最後の現世－１（後書き）

感想・指摘・ご意見よろしくお願いします。
皆様のお言葉で、より良い作品にしていきたいと思います。
よろしくお願いします。

００２　最後の現世ー２

さて…最後の仕事か。
こうやって人の先を見ることも今後ないだろうが。

俺は、写真をじっと見つめる。ーー冴えない男だーーどうせなら美女のほうが…
いや、最後の仕事だ。贅沢は言うまい。

なんてったって、この能力とも、この生活ともお別れできるのだから。

そのことに気が付いたのはつい先日だった。
基本的に変化のない生活を繰り返す俺にとって、自分の未来ほどどうでもいいものは無かった。

その日は普段見ない夢を見た。
知らない場所で、知らないヒトと話す自分。
最初は、何を今さら…とため息をつき呆れたもんだ。

だが、同じシーンを何度も見ると気にもなるもんさ。
そして、自分の先を見てみた訳だ。

するとどうだ？あるときを境にまったく見えない。
その境が今日。この仕事の後、話している最中から何も見えない。

だから、こんな気分は久しぶりだ。
未知なる体験がある。

今までは、すべて先に理解していたのだから、驚きもない。新鮮さなどない。
モノクロナ世界だった。
この能力から…開放される！！
味気ない。拘束されたこんな世界に未練などないのだから。

…よし。
依頼の＞先＜は見えた。
後は、報告書を作成して……

しばらくすると、こちらに向かってくる足音が聞こえる。
「どうだ？終わったのか？」
「はい。こちらが報告書です。
その方は、何もしなければ明日未明に自殺をするでしょう。
場所については、報告書をご確認ください。」
「ふむ。」
男は――実の父親は――渡された書類を確認した後、
部下に渡しいくつかの指示を飛ばしていた。
多分、その男が死ぬ前に確保するはずだ。

「それで…話しとは何だ？」

「その話しをするには、母にも聞いていただきたいのですが？」

「それなら問題ない。ほれ？」

男がこちらに向かってケータイを投げる。

「ＴＶ電話だ。見えるだろ？」

「…確かに。お久しぶりです。お母さん。」

ＴＶ電話越しに見る母は引きつった笑顔でこちらを見ている。

…しかし、何も声をかける気はないらしく、そのままの表情でこちらを見るばかりだ。

「さぁ、確認ができたならそれを返せ。

そして早急に話しなさい。

時間は無限ではない。

貴様にかける時間など、そう多くはないのだから。」

ふん…こんな会話でも、家族の会話だと思っているのだから最悪だ。

まぁ…あとほんの少しだ。

お？頬の筋肉が動いている？もしかして俺は笑っているのか？？

それを見た男の表情が、驚愕に変わっている。

そりゃそうさ、最後に笑ったのがいつかなんて、俺ですら思い出せないのだから…

「おい…何を笑っている？い…いや、笑えたのか？」

「ええ…笑えたことには私自身驚きましたが、
これから起きる事に歓喜しているのは、間違いないのですから。」

「…何が起こる問いのだ？
貴様の人生は、ココに繋がれ他人の＞先＜を見、
私たちの養分となること以外に何もないというのに。」
男は、なんとか表情を固めこちらに言ってくる。

「いえね…そうでもないんですよ。
もう、あと数分であなたの目の前から私は消えます。
きっと、この世界から存在すらなくなるでしょう。
別に死にはしないですがね。」

「…そうか。
だから、この場が必要だったのか。
だが、そんなこと私が許すとでも？」

「分かっているとは思いますが、これは回避不能です。
同時に、私自身がそれを望んでいます。」

「いいじゃない。あなた。
こんな気持ち悪いのいなくなってもらいましょうよ。」

今まで、一言も発さなかった人物――母親だ――がようやく言った
言葉は
やはりと言うべきか、俺に対する完全な拒絶。

「すでに代わりはいるじゃない。
確かにココまで完璧ではないけれども、
商売に問題は無くって？」

まぁ…すでに一度見た光景ではあるが、やはり良いもんじゃない。
完全な拒絶は、いくら感情が希薄になっていても痛い。

「話しはおしまいかしら？なら、私はもう良いわよね？」

「ええ…今までお世話になりました。お母さん。」

言い切ったと同時に電話は切れたようだ。
画面には『通話終了』と出ている。

「それで、いつだ？」

「もうまもなくです。」

「そうか。
…おい！あれをこいつに渡せ。」

指示された部下は、どこからか小さなリュックを持ってくる。
なぜかは知らないが、彼は俺がいなくなるのを知っていて準備していたらしい。

「何も父親らしいことはしなかったからな。」

「これは？」

「お前が見た未来にこれは無かったのか？」

「もちろん。分かっていればこんな顔しないですよ。」

そう、本当に僅かだが俺の顔に表情が現れている。
こんなに表情が変わることは今までありえなかった。

「これは…先ほど言っていた代わりの子ですね？」

「そうだ。きっと役に立つだろう。
…すまなかった。
そして

達者でな。」

「……」

何も言えなかった。
いや、何を言われているのかすら分からなかった。
なぜ、こいつが謝り、『達者で』などと言っているのか。
意味が分からない。

半場パニックになったところで、視界と思考がぼやけてくる。
どうやら時間らしい…

「…それでは、さようなら。
旦那さ…お父さん。」

そこで、完全に視界は真っ白になってしまった。

００２　最後の現世ー２（後書き）

第二話如何でしたでしょうか？

ようやく異世界へ旅立ちます。
基本的に物語の進行は遅めになると思いますので、
気長に付き合っていただけると幸いです。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。
より良い作品作りへ、皆様のお力をお貸しください。

００３　得るもの失うもの（前書き）

何とか週一更新をしていきたいと思います。

それでは、よろしくお願いします。

００３　得るもの失うもの

「お～い」

・・・

「もしも～し。」

・・・

「ねぇ～・・・言葉が通じない？？」

・・・

「何の反応もないって…まさか失敗？」

目の前には、銀髪ポニーテールの女性がこちらを覗き込んでいた。どこかは分からないが、元の場所とは違う場所へ飛ばされたらしい。とてもきれいな女性に覗き込まれるなんて、案外恥ずかしいもんだな。

そんなことを考えながらボーっと見つめてしまった。

「う～ん・・・元に戻したほうが「まて！！大丈夫だ。言葉も分かる。」・・・へ？」

焦った。あんまり綺麗だから見とれてたけど…戻されるのは勘弁願いたい。

寝かさせていたベッドから起き、周囲を見渡す。
…白い。
ここは白いだけで何もない空間に、ベッドと先ほどの女性がいるだけだ。

「ここ…は？」

「え～っと、気付いてたならすぐに反応してもらいたかったのだけど…
まぁいいわ。」

そう言って笑顔を向けてくる女性。
表情がコロコロ変わる人だなぁ。
困った顔をしてみたり、怒ったと思ったら笑うし…何よりきれいだ。
でも、彼女はどういう存在だ？

「初めまして、私はエリス。これからあなたの今後の説明をさせてもらうわ。
その前にあなたの名前を聞いてもいいかしら？」

「初めまして、先ほどは失礼しました。
私は綾瀬　翔といいます。
それで、ここは？」

「カケルね？よかった…人違いじゃないみたい。
あっここは、あなたの居た世界と私の居る世界を繋ぐところね。

イメージ的には空港のロビーかしら？
とりあえず、今なら今までの生活に戻れるぎりぎりの場所ってこと。
」
空港…イメージ沸かないな…
だが、状況は分かる。
ここで、選択するのか。

「それじゃ、早速だけど説明させてもらうことになるけどいいかしら？
こっちにも時間があまりないから…」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

「なんか、妙に落ち着いているね？普通こーゆー時ってもっとパニックになると思うんだけど。
まぁ、君の能力考えたら仕方ないか。
それじゃ始めるよ？

まず最初に、
あなたには断る権利があります。
あなたには知る権利があります。
あなたには選ぶ権利があります。
あなたには
話を聞かずに帰る権利があります。
どうします？」
なるほど。

こっちのことは大体知っているんだな。
だが…

「帰るつもりはありません。
能力について知っているのなら、私の生活環境も知っているはず。
あそこに戻っても…」

「ホント??

よかったぁ…」

ひどく安心した様子で笑顔を見せるエリス。
この表情の変化は見ていて飽きないから良いんだが、
話が進まなくて困る。

「それで?俺は何をすることになるんです?」

そう、そこが重要なんだ。
既に『先』が見えていないため、正直不安もたっぷりだ。
なぜ、『先』が見えないのか。
何を求められるのか。

「そうね…え〜っと、まずはお願いなんで、敬語はやめて?
あなたが来てくれるなら、本来なら私が敬語を使わなきゃいけないんだし…」

「はぁ…敬語をやめるのは、問題ないけど…なんでエリスさんが敬語になるの?」

「あぁ〜さん付けも無しで…それについては、後でわかるわよ。

今は、これからのことを説明するね？」

「ん…よろしく。」

エリスが真剣な顔で話し始める。

「まず、あなたが失うものと得るものを説明するわ。
気付いていると思うけど、失うものは『先見』の能力と…『名前』よ。
まぁ、『先見』を消す為に『名前』も失うのだけれど。
そして得るものは…その『先見』と『名前』に匹敵する『魔力』・『体力』・『気』・『能力』。
『能力』に関しては、良いものも悪いものも両方あるから、なんとも言えないんだけどね。

それでも、あなたの得るものはとんでもないわ。
ハッキリ言って、チートよチート。

まぁ、それだけ『先見』の能力がすごかったってことなんだけどさぁ。」

なんか、聞きなれない単語が踊っているんだが…
『魔力』ってあれか？魔法が使えちゃうわけか？
『気』って…なんか、漫画の世界だな？ぉぃ！！？
そして、ものすごい大事なことをスルーしているような。
『能力』の悪いもの。これってなんだ？

「なぁ、『先見』が無くなるのは歓迎なんだが、
『能力』の悪いものってなんだ？」

「あの…その…いくつかあるんだけど、一番やばいのだけ教えるね？
『トラブル巻き込まれ体質』
これは、読んで字の如くってところよ？
行く先々でトラブルに会うみたい。
まぁこれは、あなたの世界に居るときの生活状況で得られる『能力』に付属されてるから…
諦めて。ごめんね？」

まぁ、幸運なんて思いをしたことがないのだから、
ある意味それ位で済んでよかったと思うべきなんだろう。
むしろ、イロイロと経験できるチャンスが多いってことなんだろ？
好都合さ。

「OK…能力についてはおおむね分かった。『魔法』とかイロイロあるんだろうけど、
そっちは後回しだ。
俺は結局何をするんだ？」

エリスは驚いた顔をした後、何か申し訳なさそうな顔をしている。
何かを言いかけて、またやめて…
何度かそれを繰り返したところで、意を決した顔をこちらに向ける。
「私のご主人様なって！！」

００３　得るもの失うもの（後書き）

第３話如何でしたでしょうか？

とりあえず、ヒロイン１号の登場です。
次話で、主人公の当面の目的と異世界の世界情勢について
触れていきたいと思います。

５話には異世界に送りつける予定ですので・・・

ご意見・ご感想よろしくお願いします。
より良い作品作りへ、皆様のお力をお貸しください。

００４（前書き）

昨日更新したんですが・・・
なぜか反映されていない罠。
残念です。

とりあえず、ちまちま更新します。

004

「んじゃ、当面の目的とか説明するわ」

「いやいや・・・ちょっとまて」
そんなことよりも、さっきの方が気になって仕方ない。
つか、普通おかしいだろ。
第一、俺はそういう存在になりたくない。

「まずはさっきの『ご主人様』になれって、理由を話して欲しい」

「核心部分はまだ無理よ。
絶対いつか話すから・・・
今は、その言葉だけを覚えておいて。
そして、私はあなたを裏切れないってことも。
おねがい・・・」

・・・反則だ。
こんなにも女性の上目遣いが効果的とは。
まぁ、こんな綺麗な女性の頼みを断る男などいないさ。

「裏切れないのがこちらも同じさ。
あの世界から救ってくれた恩人を裏切るわけもない。
ま、いつか話してくれることを待ってるよ。」

話せないことをこれ以上気にしていても仕方ない。
俺にできることをこなしていくか。

「で、何をすればいいんだい？」

「ん・・・説明するわね。
細かく説明すると長くなるから、
とりあえず必要なポイントだけに絞るわ。」

「それでかまわない。
何をしてすごすのか、
世界情勢はどうか、
どんなことができるのかを
重点的に頼む。」

「もちろん。そのつもりよ。」

・・・
・・・
長かった・・・
あれから2時間もかかってしまった。
彼女の説明が下手なわけではないんだけど・・・
まとめると、

・『ＭＷ』（マテリアルウォー）に参加し、優勝するのが目的
・『ＭＷ』とは、言わば各国間の戦争
・『ＭＷ』の優勝国が１０年間世界の政治の中心となり支配していく
・『ＭＷ』は団体戦であり、５～１０人で組む。各国３チームまで
出場可能
・『ＷＭ』の国内選考までは３年、本戦は４年後にある
・『ＭＷ』予選までを『学園』にて過ごし、メンバーを決める
・　勝者には、かなりの特権を与えられ、エリスにはそれが必要
・『ＭＷ』参加国は２０カ国以上
・『ＭＷ』のおかげで、国同士の戦争は無いが、魔獣と呼ばれる人

に害なす生物がいる
・『学園』在籍中は、ギルド等のクエストを行い、実力ＵＰと金を稼ぐ
・『世界』の人種に関しては、人類、亜人類、魔人、獣人類等と多種多様である

他にもイロイロ言っていたが、現在必要な情報はこの程度だろう。
では、なぜ『宝石』を俺に持たせたかといえば、
『魔法』を行使する際、その属性に合った『宝石』を身に着けることで、
威力の増加や発動時間の短縮といった効果が得られるらしい。
とりわけ、純度や大きさによって効果が上がるが、
持ってきたものは特に効果が期待できるとのこと。
『ダイヤ』は特に優秀で、全ての属性効果の向上を見込めるらしい。

「ふぅ・・・一気に覚えるには難しいな」

「大丈夫よ。生活してれば覚えることだから。
それに、私がいるから。」

顔を赤くしながら言うエリスは・・・
とても綺麗だった。

「・・・」

「なによ？」

エリスは怪訝そうな顔でこちらを見ている。
まぁ、何も言わず見つめたらそういう反応も普通か。

「いや、なんでもないよ。
そういえば、いつそっちの世界へ行くんだ？」

「もうすぐよ。
さっきも言ったとおり、あなたの名前は無くなるから。
それの代わりを決めたら、向こうへ行くわ。」

「自分で決められるのか？」

「えぇ。
ただし、下の名前を変える必要は無いの。
だから難しくは考えないで？」

「そっか。
なら、『四宮（シノミヤ）　翔（カケル）』にしたいと思う。」

『四宮』には意味がある。
ただ、他の人には意味が無いんだろう。
でも、『名』はイメージを表すはず。
なら、自分のイメージをあげる『名』は意味があるはず。

「いいんじゃない？
私としては、『カケル』って呼び続けるだけだしね。
それじゃ・・・行くわよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1573n/

異端の魔術師

2010年11月2日08時55分発行